

## 金 李 屏 山 攷

野 上 俊 靜

漢代佛教が支那に傳來してより、支那在來の思想信仰である儒教、道教と佛教との間に様々なる交渉複雑なる關係を生ぜし事は云ふ迄もない。爲政者の政治的權力を背景として、三教徒の間には多種多様な葛藤、紛争を織り出し、且教理上の論争も繁く行はれたとともに、一面三教の教理の融會調和の論も種々行はれたものである。李屏山はかゝる三教調和の理論を振りかざし、宋儒の佛教攻撃論に對して痛烈に反駁を加へし金代第一の思想家である。

### 二

李屏山の傳は『中州集』卷四『歸潛志』卷一『金史』卷二六『弘簡錄』卷二四五『宋元學案』卷一〇〇『居十傳』卷三五等に見えてゐる。<sup>①</sup>今彼の傳の概略を示さう。

金世宗大定二十五年南宋孝宗淳熙十二年（一八五）生、哀宗正大八年南宋理宗紹定四年（二三）死である。尤も右の諸傳には大定二十五年に生れたとは見えてゐないが、正大末年（八年）都の汴に於て歳四十七を以て寂すとあ

るから、是に依つて逆算すれば大定二十五年生れとなるのである。李純甫、字は之純、自ら屏山と號した。弘州襄陰の人である。<sup>②</sup>幼にして穎悟異常、初め詩賦の學に志し、左氏春秋を讀み、更に經學に意を注いだ。次いで傳には章宗の承安二年經義進士に擧げられたとあるが、此の年は西曆一一九七年にして彼の十三歳の時のこととなる。歳十三位にして進士の試験に及弟するとは先づ致へられないことであり、此處に金史本傳等の中に一矛盾を感じずるものである。而して青年時代に於ては莊子列子の書、戰國策等を好んで讀習し、兵を談するを喜び經世の心に燃えてゐたと云ふ。泰和六年西曆一（屏山二）二〇六（二歲）金章宗南方宋を征せんとするや、屏山上疏して時事を論じ、選ばれて軍に従ひ、淮西を奪取して和成りて後は翰林に入つた。衛紹王大安二年西曆一（屏山二）二一〇（六歲）漠北に興起せし蒙古が其の銳鋒を南に向け金に侵入したから、再び時事に就いて上疏献策したが報せられず野に下つた。其後蒙古の南侵益々甚しく、宣宗至寧二年西曆一（屏山三）二一四（〇歲）金は其の壓迫に堪へかねて、都燕京を捨て、河南の汴に移り、翌年蒙古の軍燕京に入つた。此間再び屏山は翰林に入つたが時の金の宰相朮虎高琪と合はず間もなく去つた。されど宣宗興定三年西曆一（屏山三）二一九（五歲）朮虎高琪誅せられた後、三度翰林に入つた。哀宗正大八年西曆一（屏山四）二三二（七歲）都汴に於て卒した。右は屏山の傳の概略である。金末の紛亂漸く繁からんとする頃の人である。而して屏山の性質生活態度は次の如くであつたと云ふ。自己を信ずること極めて深厚であつた。酒を特に好んだ。殊に其の失意時代に甚しきものがあつた。貴賤を問

はす相手として飲み、飲めば必ず酔ふに到つた。されど酔ふも著書を廢せず、儒道二教に精通した。晩年には好んで禪僧と交遊し、深く佛を喜び其の奥義を究めた。

三

次で屏山の撰文著書に就て述べる。現在吾人の知り得た屏山の文、著書は次の如くである。  
現存部

詩二十九首 中州集四卷

李翰林自贊 金文雅七卷

棲霞縣建學廟碑 金文雅八卷

重修面壁庵碑興定四年 金文最一卷四

新修雪庭西舍碑 金文最一卷四

契嵩の輔教編に加へたる序

司馬溫公不喜佛辨③ 『佛祖曆代通載』卷三

程伊川異端害教論辨 同 卷三

心説上下 明治廿八年刊『鳴道集說』卷尾

鳴道集說④

散逸部(儒道に關するもの)

老子集解 『金史』等傳 『元史藝文志』

莊子集解 『金史』等傳 『元史藝文志』 『補三史藝文志』道家類

中庸集解 『金史』等傳 『補三史藝文志』四書類

中國心學 『金史』等傳 『補遼金元藝文志』

同(佛敎に關するもの)

楞嚴經解 『金史』等傳 『補三史藝文志』釋家類

金剛經解 同右

西方父敎 同右

右は屏山に關する諸傳及び書志類の諸文献に依つて彼の著書を擧げたものであるが、此等のものが今日眼福を得ざるのは誠に不幸である。若し此等のすべてを見ることが出來て且その著作年代が判然とするならば、彼の思想の内容及びその發展過程がより詳細に窺知し得られるであらう。

#### 四

さて鳴道集說到就てあるが彼のこの著書の作意は次の文を以て理解し得られよう。

江左道學。倡於伊川昆季。和之者。十有餘家。涉獵釋老膚淺一二。著鳴道集。屏山哀矜。作鳴

道集說。鳴道集說序『湛然居士集』

卷十四

諸儒鳴道集二百一十七種之見解。是皆迷眞失性。執相循名。起鬭諍之端。結惑業之咎。蓋不達以法性融者也。屏山居士。深明至理。析而論之。『佛祖歷代通載』  
屏山自身の言葉にも  
卷三

惜夫四聖人沒。列禦寇駁而失真。荀卿子襍而未醇。揚雄王通氏僭而自聖。韓愈歐陽氏蕩而爲文。聖人之道如綫而不傳者。一千五百年矣。浮屠氏之書。從西方來。與吾古聖人之心。魄然而合。……諸儒陰取其說。以證吾書。……小生何幸。見諸先生之論議。心知古聖人之不死。大道之將合也。……箋其未合於古聖人者。曰鳴道集說。(鳴道集說自序)

とある。即ち宋學の諸儒の鳴道集に見ゆる二百一十七種の見解は皆眞を迷はし、性を失したもので論旨は肯綮に當つてゐない。凡そ古聖人の道は佛教の所説に合致するものである。鳴道儒者の佛教攻撃論は見解の誤れるものである。此に對し駁論せしものが鳴道集說に外ならぬ。

さて次に問題になるのは此の書の著作年代であるが、先づ元の念常は金泰和四年<sup>西曆一</sup>二〇四とし、又此に賛する人もある。<sup>⑤</sup>されど前述の如く屏山は大定二十五年生れであるとすれば此の年は彼の二十歳の時に當る。これは彼の傳經歷より見て不合理にして、賛し難き説である。又興定、天元の交<sup>(西曆一二二一)</sup>と云ふ説もあるが、これは屏山の三十三歳より三十九歳の間の事となつて比較的に否み得ない<sup>⑥</sup>

ものであるが、何によつてかく主張し得るか不明である。思ふに著作年代に就いての判然たる記載は見當らないものであるが、耶律楚材の鳴道集説序に依れば、屏山が万松老人に師事して佛學を研究するに至つたのは二十九歳以後の事であり、しかも三十歳の時宣宗至寧二年には金の都は燕京より河南の汴に遷され、屏山も此と同時に移住したやうであるから、燕京報恩寺に住せし万松行秀<sup>⑦</sup>の門をたゞいたのは此の時以前であらう。しかも此後暫くにして屏山は野に下つてゐるからこの失意時代に大いに佛學への精進を遂げ、相當年月を経た後名著『鳴道集説』を出すに至つたものであらう。即ち吾人が類推して知り得るところは極めて晩年の作であらうと云ふことである。

さて此の書の傳來であるが、先づ此を引用するものは、元念常の『佛祖歷代通載』にして、その卷三十一に十九編が見えて居り、又清黃宗義の『宋元學案』にたゞ一編を見出し得るのみである。従つて此の書の完本は見るを得ないこととなつてゐたが、明治二十八年西本願寺の人々よりその殆んど完本に近きものが版行された。これは百八十一編より成つてゐる。『通載』に見える十九編の内十八編はこれに見えてゐるが一編のみは別である。故に本書二百一十七編の内百八十二編が知られてゐるわけである。<sup>⑧</sup>而して外に日本に於て版行されたことはないとされてゐたが吾人は先頃麓一高教授の所藏本を見ることが出来た。徳川時代の版本で一冊になつてゐるが刊記が見えないのは不幸である。又脱丁が多く内容は却つて西本願寺本に依つて補足されるものであるが、時に一字々々を修正

し得るところもある。此の版本に依つて知り得るところは鳴道集説が五卷に分れて居り且日本にも版行されたことがあつたと云ふことである。然して京都帝大圖書館所藏本に就いて一言する。二冊にして五卷に分れ、第一冊は卷一、二、三、第二冊は卷四、五である。幸ひに末尾に次の如き刊記がある。

天和三 癸亥 曆仲冬吉祥日 田中庄兵衛板行

なほ右の刊記の横に朱書にて

一本 延寶二甲寅 年林鐘吉旦 中野是誰板行  
とある。

此に依つて本書が延寶二年、天和三年に夫々板行されたことを知るとともに當時日本の人々に讀まれし事が推察される。而して吾人の見た感じでは麓氏本と此の京大本とは同じ板の系統に屬するものであらうと思ふ。

本書が五卷に分れてゐたことに就ては『金史』以下の諸傳には見えないが清代の記録には判然と見える。即ち盧文昭の『補遼金元藝文志』釋家者流の條に

金李之純 鳴道集説五卷

とあり、又錢大昕の『元史藝文志』釋道類に

李純甫鳴道集説 五卷 金

と見えてゐる。凡そ藝文志に見ゆる書はすべて當時現に存在してゐたものののみであるとするは妥當なることではあるまいが、恐らく清朝攷證學の泰斗錢大昕が『元史藝文志』を編纂せし時は本書の現存を知つて書いたものであらうと推察する。即ち五卷本の鳴道集説が清朝時代には行はれてゐたものであり、従つて徳川の版本も清朝の版本の傳來によつて行はれたものではなからうかと、一應は致へられるが、右の天和三年は清朝聖祖の康熙二十二年、延寶二年は同じく十三年に當り、清朝成立後餘り久しからざる時であるから、より以前の時代のものが傳つてゐたとも思はれる。本書の日本傳來については後攷を俟つ。ともかく清朝は四庫全書の編纂等古書逸書の探索が繁く行はれたものであり、且清朝は後金と稱せし如く金朝と同祖先であるを以て、金代のものに對しては自ら特殊の用意があつたものであり、従つて清朝時代に本書が版行されしことも容易に想像し得る。

## 五

さて鳴道集説等に依つて窺知し得る屏山思想であるが、これは諸學者によつて指示されてゐる如く、華嚴の圓融無碍の教學によつて、儒教道佛の三教一致の説であつて、即ち佛教に思想的基調を置いた三教調和論に他ならぬ。金代に於て三教調和論的思想を有したものは當に李屏山のみではない。彼の師万松老人行秀も、又同門の逸材にして元初に活躍した耶律楚材の上にも判然と認め得るところである。金代佛教の特徴は華嚴教學を内典研究の中心となし、實行に於ては禪を主體とし



たものであつたのである。而も多分に思想的抱擁性を有してゐたもので、嘗に佛教の諸教學に於てのみならず、異教たる儒教、道教に對しても全く同様であつたのである。かくの如き金代佛教の特徴たる儒道佛兼學、三教融會的思想の最高峯をなすものが屏山のそれに外ならぬ。

而して融會的である屏山も宋儒の誤つた佛教攻撃論には敢然と立つて駁論してゐるもので、これは北方金と南方宋との當時の政治的關係と相似たるものあるは面白きことである。北宋南宋三百餘年の間北方の遼金に常に壓迫されてゐたものである。

従つて宋人は遼金の國家を憎むこと甚しく、著しく排他的となり非妥協的となつて、黨派を作つて争ひしことは政治界のみならず宋學内部に於ても同様であつたと見るべく、且政治的には壓迫されてゐても文化的には夷狄の立てし北方の金を深く悔蔑してゐたものであらう。之に對して金人は文化的にも南宋に對立し得るものを作り出さんと努力せしものではなからうか。宋と金とは文化的にも競争的立場に立つてゐたものではなからうか。李屏山は金國を作り出した女眞民族出身ではなく漢人であるにしても、當時の南人と北人とは相當區別して致ふべきであらう。即ち一般文化の上に於ける金と宋との對立的傾向を又最もよく李屏山と宋儒との關係の上に見出し得るものではあるまいか。

註①『弘簡錄』『宋元學案』『居士傳』等の諸傳は多く『金史』等に見ゆるところを撮要轉載したものである。

② 現今の河北省陽原縣。

③ 以下の二文は『金文最』卷三〇にも見えてゐる。又明治廿八年刊『鳴道集說』の末尾には樸説として、此の二文の外になほ數論が見えてゐる。

④ 後に詳述する。

⑤ 『佛祖歷代通載』卷三一 久保量遠氏『支那儒道佛三教史論』頁五六二

⑥ 常盤博士『支那に於ける佛教と儒教道教』頁四〇〇。而して興定（一二一七—一二二一）の次は元光（一二二一—一二二三）である。

⑦ 西曆一一六六—一二四六に亘れる人。金代第一の佛僧。曹洞禪青原下二三世の法嗣に數へられる。燕京を中心とした北支那に化をたれし人。傳は『五燈會元續略』卷一、『繼燈錄』卷一、『補續高僧傳』卷一八、『五燈嚴燈』卷一四等に見えてゐる。從容錄等を撰す。

⑧ 『支那儒道佛三教史論』頁五六四以下、常盤博士『儒佛兩教交渉史上に於ける金の李屏山』參照。

⑨ 高雄義堅氏『金代に於ける道佛二教の特徴』〔支那學第五卷第一號〕 常盤博士、久保田氏の前記二著書等。

⑩ 行秀に就ては『五燈嚴燈』卷一四に「師（万松）於孔老莊周百家之學。無不會通。恒業華嚴。」とあり、『補續高僧傳』卷一八に「師天資敏利。於百家之學。無不達通。三閤大藏。首尾熟貫。」と見え、又『繼燈錄』卷一に「師於周孔老莊百家之學。無不博通。三閤藏教。恒業華嚴。」とあり、更に耶律楚材の從容錄序に「有萬松老人者。儒釋兼備。宗說精通。辨才無礙。君可見之。」とある如く、行秀は諸子百家の説に精通し、然も佛典研究の中心を華嚴教學に置いてゐたものである。而して又彼は碧巖錄に於ける雪竇と從容錄の天童とを孔子門下の子游子夏にたとへ、詩に於ける李白杜甫に配したりしてゐる。（評唱天童從容庵錄寄湛然居士書）要するに儒佛兼學、三教調和論者である。

⑪ 傳は『元史』卷一四六に見ゆ。又『地學叢書』乙編第一には張慰西論『湛然居士年譜附世系雜攷』がある。經歷を見るに至極便利である。文集に『湛然居士集』があり著書に『西游錄』がある。彼の思想信仰を検討されしものに高雄義堅氏『耶律楚材の佛教

信仰」(六條學報二二四號)がある。

楚材の學風は儒佛兼學であつた。彼が元に仕して以後は國家統治の方針としては儒教主義を用ひて、よく野蠻未開の蒙古人を導き、元初に活躍したことは史上有名な事實にして、こゝは以て彼が儒教に造詣の深かつたことを證するものである。而して『湛然居士集』卷一二『琴道喻五十韻以勉志憂進道序』に「余幼而喜佛。蓋天性也。壯而涉獵佛書。稍有所得。頗自矜大。……方悟佛書之理未盡。遂謁万松老人。旦夕不輟。叩參者且三年。始蒙見許。是知聖諦第一義諦。……」と見ゆるから、彼が幼少の時より佛教にも多大なる關心と興味とを有してゐたことが判明するとともに、万松の教を受けて始めてその信念の確立したものであることを窺知し得るのである。万松も『湛然居士集』序に彼の敬虔なる、燃ゆるが如き熱烈なる求道の態度を描寫して「湛然居士。年二十有七。受顯訣於万松。其法忘死生外身也。毀譽不能動。哀樂不能入。湛然大會其心。精究入神。盡棄宿學。冒寒暑無晝夜者三年。盡得其道。万松面授衣頌。目之爲湛居士從源。」と述べてゐる。かくて、楚材は儒佛二教兼學であるからして信仰方面にも極めて融通性のあるもので、排他的我執から脱却してゐる。即ち『湛然居士集』卷二『題西菴偉一堂の文中』に「三聖眞元本自同。隨時應物立宗風。道儒表裏明墳典。佛祖權實透色空。曲士寡聞能異議。達人大觀解相融。長沙賴有蓮峰掌。一揆江河盡入東。」とある。以て三教調和論者であることを知るべきである。

附記 所藏本の借覽を許されし、又御指教を賜はりし諸先生に厚く謝意を表す。